

内視鏡的大腸粘膜下層剥離術

診療科：消化器内科

適応症：早期大腸がん(EMR(内視鏡的粘膜切除術をいう。以下同じ。)では一括切除が困難な二センチメートル以上の病変であって、拡大内視鏡診断又は超音波内視鏡診断による十分な術前評価の結果、根治性が期待できるものに限る。)又は腺腫(EMRを実施した際の病変の挙上不良なもの又はEMRを実施した後に遺残若しくは再発したものであって、EMRでは切除が困難な一センチメートル以上の病変のものに限る。)

主な内容：従来の内視鏡的粘膜切除術では、2cm以上の大きな病変や潰瘍瘢痕を伴う病変、遺残、再発病変では一括切除が困難で分割切除となることが多く認められました。そのため病理組織学的検査が不十分となり、治癒の判定が不確実になり、結果的に遺残や再発を起こすことがありました。

しかし本方法は、病変部粘膜下層への局注液注入により粘膜下膨隆を形成後、高周波メスにて直接病変周囲粘膜の切開および粘膜下層の剥離にて病変を切除していく方法であり、腫瘍径が大きな病変でも高い一括切除率が得られます。そのため従来の内視鏡的粘膜切除と比較し、根治性が高く、かつ詳細な病理診断が可能となります。また、治療選択の一つである外科手術と比較しても精神的・肉体的負担の軽減と在院日数の大幅な短縮につながります。